

コンケン大学での居候生活 (21)

伊藤信孝

コンケン大学客員教授・工学部

過日、かつての JICA 研修員の一人であると言う国のから、メールにて連絡が入った。メール・アドレスは、一般に正式な氏名で書かれていなく、アカウントを有する人が適当な名称を付けてアカウントを取得しているので、一瞬「誰からのメールであろうか」といぶかった。開いて目を通すと内容は次のようであった。

自分は JICA の集団研修に参加した研修員の一人であるが、最近自分の今後についてよくよく考えてみたが、結果として次のような結論に達した。それによるといろいろ検討したが、さらに高等教育を受けることにした。そこでいくつかの可能性を検討したが、現時点では筆者が滞在しているチェンマイ大学が最も優先的に考慮すべき大学と言う結論に達した。自らの専門性などを鑑みているとチェンマイ大学の農業工学科は、特に優れており、博士課程での高等教育を考えると、チェンマイ大学は最も考慮すべき大学の一つとなった。そこで、上記の私の構想についての実現可能性について尋ねるべく、このメールを書いた。ついては、できれば、大学を含むどこかの助成財団からの奨学金を得てその課程を修了したいが如何な物かと言うのが趣旨であった。

このメールを読んだの筆者の考えは次のようである。質問の内容の趣旨は良く理解できたが、この種の問い合わせに於ける致命的な部分が筆者の対応への士気を低下させた。すなわち、このような場合の対応には、それなりの常識、礼儀、最低限の応募者自身の情報提供が必要である。しかし今回の場合は余りにも、それぞれの条件についての満足度が少なすぎると言うのが筆者の第一印象である。具体的に如何に説明を加えると次のようになる。

1) CVの添付

まずは応募者自身を知るための履歴書 (Curriculum Vitae) が添付されていない。これは致命的である。なぜなら、メールにおいても、ニックネームでしか応募者自身を知ることができないからであり、応募者は筆者を研修期間中の講義などでよく知っているかも知れないが筆者に取っては数ある研修員の中の一人である応募者を特に中言いで記憶しているわけではないから、確認することは難しい。研修後も頻りに連絡を保ち、相互に熟知の人間関係でも築いて居るならいざ知らず、数年も数十年も過ぎた後で、突然その様な連絡が来ても、咄嗟にその差出人を確認することは不可能に近い。また応募者と言っても希ではあるが同姓同名、あるいは性と名前が同じと言う場合もある。本人の確認をすることは受け入れ、あるいはそうした問いあわせに正確に対応するための最重要項目である。

生年月日や専門、学歴とその課程における成績の評価、特技 (特殊技能、後江波各種技

能、例えば各種機会の運転免許、溶接や特殊技能免許、認定書など)、その他の能力などを
知る上で重要、かつ必要である。応募者個人を確認するためにCVはその意味で常に添付、
提出すべき必要書類の一つである。応募者と受け入れ責任者のマッチングが必要であり、
形だけの受け入れ、証明書発行という形の留学は意味を持たない。途上国の中にはそうし
た形の課程修了もないとは言えないと聞く。それはそれで政治的な判断に基づく対応であ
り、本来の留学、あるいはその種の学術的課程修了のカテゴリーからは外れる。自らが論
文を書かず、別人か、あるいは組織に属する部下の誰かが其れを準備すると言うのも良く
聞いた話である。あるいはそれなりの対価を払って請け負う(あるいは請け負わせる)シ
ステムもあるらしいと聞いたこともあるが定かではない。この話は余談であるので本論に
戻るが、特に受け入れ責任者が応募者自身をよく知る情報が添付されていないことは致命
的であり、中に入って受け入れ責任者に応募者を紹介するにもなすすべが無い、

2) 研究計画

応募者自身が何をしたいのかを示す書類が研究計画である。この計画書が添付、あるい
は記入されていないと言う事は何をやるのかが不明で、その意思もないと言う事にもつな
がる、では何をしに来るのかと言うことになり、そのチベーションの低さが折角の機会を
失わせることにつながる。特に博士課程とも成れば研究計画は極めて重要であり、受け入
れ責任者(受け入れ後の指導教員)が最終的に受け入れを決断するかどうかは、この計画
書にかかっていると行っても過言では無い。

3) 学資

留学には学費が必要である。私費、公費(県市町村や中央政府機関など各種ある)など
各種あるが、その受給認可、取得は上記の2つ、すなわち応募者の履歴書、応募者の研究
計画書と、しかるべき人物(個人あるいは機関の関係者)の推薦状でほぼ最終的に受け入
れがきまる。積極的に自らの研究費の一部を用いて奨学金として助成する教員も居るが教
員個々の条件、都合により異なる。

4) 応募書類

留学にあたっては、留学したい大学の応募条件に基づき、用意された応募書類に必要書
類を添えて決められた期日までに提出することで応募手続きを終える事になる。

上記は留学を希望し、応募を考える場合の最低限の準備書類、手続きである。

かつての JICA 集団研修の研修員が修士や博士課程の高等教育を目指した事業ではないか
ら、将来的に更なる高等教育への進学を考えて JICA 研修事業に派遣、受け入れられるケ
ースは少ないがないわけではない。

筆者が知る限りの範囲で理解している日本留学への方法は3つある。

1) 在外公館を通じての日本政府助成の奨学助成

2) 私費留学

3) 国家間政府プロジェクトに基づく人材育成を目指した高等教育留学

上記のうち1)は受け入れ承認がなされると日本政府が全面的に支援するので応募採用者

にとっては極めて有り難い制度である。それだけに競争率も高いと言われる。

2) は最も多くの留学生がこの形での留学と見て間違いは無い。しかし学資の準備が必要でそれだけの支出をまかなう余裕が必要である。3) は日本政府が関わる国家間プロジェクトがなければ該当しないので、このケースは少ない都考える。実際に受け入れた経験者の話しでは、応募者は相手国が将来の構想を描き、適合した応募者を推薦するので受け入れ側は殆ど関知しない。しかし大学卒業顔 10 年ほども経っていると基礎学力はかなり低下し、相手途上国では技術者よりも管理者（管理役職者）の方が上下の関係が高く、10 年もアカデミックな事から離れて管理食として関わっていると、その学力低下は想像を超えるものとなる。それでも修士課程哉博士課程となると最終的なチェック・ポイントとなる公聴会で如何に乗り切ることが指導教員として頭の痛くなる場所であると聞いた。公聴会では指導教員が発表するのではないから、発表者自身が何処まで自分の研究を理解し、質問に答えることができるかにかかっている。かといって全ては留学生本人の責任であり、たとえ所定の課程を終えることができなくても指導教員に責任はないという訳にはいかない。しかも、国家間プロジェクトに基づく留学生という、背景も知らず、また専門の違いも構わず、自分のところで受け入れたいと言うトンチンカンな教員も出てくる。受け入れてくれるなら何処でもと言う、いわば「おぼれる者はわらをも掴む」が如き留学生の心境に火を付ける迷惑な行為も出てくる。当初の「国家間プロジェクトに基づく留学派遣覚え書き」も知らず、また中学レベルの学力である事も知らず、ひたすら受け入れたいと主張する言い訳のない教員が受け入れの意思を表明するなど、大学に於ける国際交流のレベルの低さに驚く。留学生の出身国の大使館にまで説明に向く指導教員の苦労も知らずにであると嘆いていた。JICA 関係の話をさらに一つ紹介する。米国で開催の国際学会に出かけたとき、知人で、日本から同行した教員のもとに一人の若者が走り寄り「貴方は日本の K 先生ではありませんか？」と尋ねてきた。K 先生が「そうだが」と答えると「私はかつて大阪の JICA の研修員として日本に滞在し、お世話になった者ですが、現在此方の大学の大学院に入って頑張っています」と言う。彼にとって日本での JICA 研修が彼にとってはどの様に写ったのかは想像の域を出ないが、何某かの引き金が彼をしてその決断を引き出したものと推察する。

ついでに余談ながら、これまでに経験した研修事業での更なる例を紹介しておく。

定年前の経験であるからかなり昔の話である。授業のため、講義室に入ると一人の犬種運の姿垂が目に入った。大学でのアカデミックなプログラムを終えて間もない若者とみえる一人の研修員が、自分の前の机の上に両足を上げている。講師に敬意を払うこともなく、平然としてその姿勢を維持している。異常であり、あまりの振る舞いではあるが咄嗟にどの様に対応すべきか判断できぬままに一日の講義は過ぎた。余りの異常な振る舞いに戸惑意を隠せなかった。日本人学生であったならば、即刻歩み寄り張り手の一つもと思う感情を抑えた背景には、その研修員を派遣した相手国への配慮とここではしておく。それ以後大学教育を終えたばかりの人間は研修員としての派遣から外すと言う対応が成されたと聞

き及んでいるが定かではない。しかし、その時見た研修員ほどの年齢の研修員は見なくなったように思う。国際交流事業でも常に強調してきたが、国際感覚（常識）を共有する事がまずは重要である。自分勝手な振る舞いをそのままにしておくとう交流事業は伸展しない。「行儀が悪い、礼儀を知らない」と言うとう如何にも「年寄りの愚痴」と言う意見も良く聞くが、筆者は基本的に従うべき基本的姿勢は「礼儀作法、常識、エチケット」の共有で蟻その上に知識の共有が成されなければ意味はない。オンラインでだからと言う事で、発表講演者がカジュアル成す方でタイも付けず、スニーカーでジーンズという姿も時には許されるが、一般にはそうではない。それを教育するのが大学の教員の果たすべき役割であり、大学が高等教育という認識の元で知識のみを教授することのみが大学の役割ではない事に通じる。あくまでも将来の人材育成を睨んだ人間形成が主たる目的である事は論を待たない。しかし、長年同じ組織に属し定職を迎えると、その組織のみが社会のスタンダードであるとう間違った認識を持つ人間が出来上がる。自分が村組織に属していたのはたまたまその時の個人的、あるいは家族的諸事情、種々の条件、社会環境に基づくものであり、必ずしもその組織が唯一の物では無いことを認識して居る人は少ない。だから退職後も苑状況を今まで通り継続できる状況を公金を使って作ろうとする。切っても切っても次から次へと同種類の人間が育ってくる。

さて先のトピックであるが、筆者がチェンマイ大学に所属していることを知る研修員とう観点から考えると、筆者の定年退職後のNPOが受諾した研修事業での研修員の一人と推察する。しかし、残念なのは、上記した様に、確かに研修員であることを確認するものの、いわゆる「研修」は修了したものの、あまり「社会常識（特に国際的常識）、礼儀作法」についてはそれを持ち合わせていない事である。相互に熟知しているとう高度に熟知の関係があっても、他の関係者に公益に説明する情報（書類）が必携である。社長や会長、あるいは高位の知人と熟知の関係にあっても、上記資料の提出はどうしても省くわけには行かない。コネを優先的に重視するなら、その道を貫くことで十分である。しかし社会一般にフォローすべき手順を追うならば、上記の項目を忘れてはならない。残念ながら研修事業には必要が無いとうのであれば、それ以上は言う必要は無い。しかし、こうした事についても、更なる知識として研修に含まれて入ればと考える。

日本では「博士課程を修了した学位保有者」の就職は極めて少なく、大学や研究機関ならいざ知らず、民間企業とも成れば極めて難しい。理由はいろいろあるが、学歴に相当する高額な給料の支払い、自社の目指す研究開発との整合性、などが主たる理由とされるが、昨今では企業のエンジニアも学位保有の必要性が高まり、企業に勤務するエンジニアの中には週末を利用した特別コースにあらためて入ったり、同種の研究テーマの元で企業の支援と共に共同研究の推進を軸に学位取得につなげる方式もある。大学、企業相互にとってウイン・ウインの関係を構築する新たな機会にもつながるメリットもある。

さて、チェンマイ大学の農業工学科での留学の可能性について尋ねてきたかつてのJICA研修生はどうなったかであるが、CVについては長い間更新をして居ないのでそれを更新

しなければならぬとの返事は貰ったが、その後の展開は未だにない。本心からその気持ちがあれば、当然全てを準備した上で連絡をしてくるはずと言うのが筆者の常識であるが、指摘されて、これから準備をすると言うのではモチベーションはかなり低いというのが筆者の判断基準である。何処の国からでも受け入れるので、貴方のネットワークを用いて奨学金助成のポスターを広く拡散してくれとの依頼も無いわけではない。しかし、能力もさることながら、本人のモチベーションが低いのは最悪である。果たしてどの様な反応が戻ってくるか、じっと事態の推移を見守っている今日この頃である。その気になれば、投資しても良いと言う人や財団は少なくないと思われるが、果たして何処まで本気で考えた後の判断かが今、ひとつ明確でない案件に投資する人は少ないし、受け入れ側もそうした応募者を敬遠するのは当然である。国策として特定の相手国からの留学生受け入れに忖度する人物の強力な支援で奨学金助成が可能となる場合を除き、何処まで本気で対応なのかを疑われるレベルでは、紹介する側も、また受け入れ側も判断を躊躇するのは当然である。高等教育を目指した問い合わせは大変嬉しいが、それならそれで声でも課というレベルの本気度を見せて欲しいものである。初歩の初歩から話しをしなければ成らないのは寂しい、と言うのが筆者の本音である。